

元気な人のもとへ幸運はやってくる

ある会社の営業担当者が、あなたのところへ、新しく開発したという商品の説明にきています。そういう場面を、まず想像してみてください。

担当者は、とても元気のいい、はつらつとした青年です。ニコッと笑うと笑顔に好感がもてます。話す声も、イキイキとしています。

「こんなすがすがしい人とは、仕事のつき合いを抜きにして、プライベートでもつき合ってみたいなあ。いい友だちになれそうだなあ」と自然に思えてくるような印象なのです。

さて偶然にも先の会社売り込んだ商品と、ほとんど変わりのないような商品を、また別の会社の営業担当者が、

「今度新しく開発したのです。ぜひ、あなたの会社で採用してもらえませんか」と売り込んだのです。

しかし、その担当者は先の人とは打って変わって、覇気のない、何かどんよりした雰囲気の人なのです。

決して不真面目というのではなく、商品説明もそれなりにきっちりとしてくれるのですが、とにかく元気がないのです。悪い言い方になるかもしれませんが、生きているのか死んでいるのかわからない、といった感じなのです。

さて、商品の価格、性能、付随的なサービス、その他もろもろのことは、ほとんど変わりがない。どちらの会社の商品を採用しても、あなたとして差し障りはない。とはいっても、きつとあなたは、どうせ取り引きをするのなら、前者の元気のいい担当者の提案してくれた商品を採用したいと考えるのではないでしょうか。あなたばかりではありません。多くの人が同じように思うはずですよ。

これは人の自然な感情なのです。

元気がない人よりも、元気はつらつな人。

ムスツとしている人よりも、明るく笑っている人。

たんとんと話をする人よりも、イキイキと躍動感をもって話をする人。

そういった人に私たちは、より強い好感をもつのです。そしてビジネスの世界でも、こういう人が、より有利な立場に立てる。より、いい仕事ができるようになるのだと思うのです。

私の考案した『成心学』に「快生思考」という考え方があります。

これをわかりやすく言えば、快く生きるということです。いつも楽しい気持ちで日常生活を過ごし、仕事にもやりがいをもって臨み、いつも前向きな気持ちで元気いっぱい生きるということです。私は、事あるごとに、この「快生思考」を人におすすめしています。

というのも、「快生思考」の備わっている人は、自然に「幸運」に恵まれてくるからなのです。「あの人は運がいい・運が悪い」という「運」です。「快生思考」の備わっている人は、思いがけないような幸運に恵まれることがとても多いのです。

先のとえ話でもわかるように、同じような商品を開発したライバル会社がいながら、なぜ多くの人が、元気はつらつな担当者と取り引きすることを選ぶのか。考えてみれば元気はつらつな担当者には「快生思考」が備わっているのです。

たとえ話をしてみましょう。

しょぼくれた顔をして仕事をしている人と、元気はつらつに仕事をしている人。さて、どちらの人のほうが出世が早いかな。

もちろん「元気はつらつな人」でしょう。なぜなら「快生思考」が備わっているからです。もしかしたら、能力的には自分よりも仕事のできる人を飛び越えて、とんとん拍子の出世を遂げるという「運のいいこと」が起こるかもしれません。

誰にでも辛いことはある。ストレスに苦しめられることもあるでしょう。しかし辛い時に「ああ、いやだ、いやだ」と嘆いているばかりでは「幸運」はやってこないのです。そういう時こそ、自分を元気づけ、イキイキと生きるような心がけてほしいのです。それが「快生思考」です。

ところで一口に「いつも楽しい気持ちでいる」といっても、「いったい具体的に、どのようにすればいいのですか。具体的に、こうすればいいということがありますか」と疑問をもつ人もいるかもしれません。

まず第一には、みなさんがたずさわる仕事を好きになるということでしょう。いやいやながら働くのでは、元気が出るはずありません。やはり仕事を好きにならなければ、「よし、やってやるぞ」という元気は出てこないでしょう。

さらにつけ加えれば、仕事以外に、趣味をもつということも大切ではないかと思えます。いくら好きな仕事であっても、働き通しでは、生きていくのが辛くなります。そんな時に、いい気分転換ができる趣味をもっていることは、大切なことだと思うのです。

何でもいいのです。読書、音楽鑑賞、旅行など、とにかく仕事から少し離れて、心身をリフレッシュさせてあげることがいいのです。

いい友人をもつことも大切です。

時には友人を誘って食事でもしながら、わいわいがやがやと楽しい一時を過ごすのです。そういう時間が、とても心をリラックスさせてくれます。

また時には、ちよつとしたグチや打ち明け話を友人に聞いてもらいたいこともあるでしょう。それもリラックスした生活を送っていくためには大切なことです。

まあ、自分を「楽しい気持ち」にさせる方法というのは、人それぞれのもものなかもしれません。みなさんも工夫して、自分を「楽しい気持ち」にさせてくれる何かを、生活の中に取り入れてみたらいかがでしょうか。きっと思いがけない幸運が、あなたの人生に飛び込んでくるに違いないと思うのです。

「がんばること」「休むこと」「メリハリをつけよう」

弱冠二八歳という年齢で、コンピュータのソフト開発会社を興^{おこ}し、大成功している青年がいます。彼もまた「運のいい人」の一人なのですが、やはり「快生思考」の大切さを熱心に語っていました。

会社の規模の大小にかかわらずなく、会社にとって「経営者」という存在は、とても大きなものです。

よく「会社が発展するも衰退するも、その会社の経営者の力量しだいだ」ということがいわれますが、確かにその通りだと思えます。社員がいくらがんばっても、経営者が無能であれば会社は衰退してしまいます。反対に社員にそれほど才能のある人材がいなくても、経営者がしっかりしている人であれば、その会社の将来は明るいのです。ですから「経営者しだい」なのです。

この青年も、実によく働きます。自己研鑽けんさんのための努力も怠りません。

しかし彼は、「**確かによく働きますが、休む時には思い切って休むことも大切なことですよ**」と言うのです。

彼は、こんな体験を語ってくれました。

一時、海外出張がとても多かった時期があったそうです。アメリカのある会社と提携するために、太平洋を月に何度も往復していました。

日本にいる時も、アメリカにいる時も働きづめで、それだけでなく海外との往復は時差がありますし、たぶん疲労が極限にまできたのでしょう。そのために倒れて寝込んでしまった

のです。

その時に彼が日頃、大変お世話になっている人から手紙をもらいました。そこには「日々これ好日」という言葉が書いてあったそうです。

「好日」というのは、「安らかに過ごせる、良い日」という意味です。その人は、この言葉で、

「働きすぎて病気になってしまったら、経営者としては失格だよ。健康管理に努めて、毎日を安らかな気持ちで送ることも、経営者の仕事の一つなのだよ」

とアドバイスを送ってきたのです。彼は、目を開かされるような思いであったといえます。つまり「自分を大切にする」ということですね。「自分を大切にする」ということも、「快生思考」の重要なファクターの一つなのです。

それ以降、彼は「働きすぎ」を改め、休日には運動をしたり旅に出たりと、自己の健康管理には気をつかいながら生活するようになったそうです。

彼の会社は今でもますます発展を続けていますので、この「自分を大切にする」「日々これ好日」という考え方によって、「幸運」をしっかりと自分の手に握り続けているのでしよう。

休むことが下手な人に限って仕事ができない

「働くことなんて楽しいと思ったことはありませんよ。ただ生活費をかせぐためにイヤイヤながら働いているんですよ」というようなことを言う人がいますね。

まあ、このような人には「幸運」など絶対にやってくることはないでしょう。

こういう人は、先ほど言いました「休む」ということも、実はヘタな人です。大酒を飲んで体を壊したり、大騒ぎをして人に迷惑をかけたたりするのは、このタイプの人に多いのです。「休む」ということが健康管理にもならず、いい意味での気分転換にもならず、かえって健康に害になったり、ますますストレスを抱え込んでしまうような「休み方」なのです。言ってみれば、そのために自分を不幸にし、不運を招いてしまうような方法なのです。

本当に「運のいい人」とは、どういう人なのでしょうか。

その人は、「仕事をも楽しむ」ことのできる人なのではないかと、私は思うのです。

「働くことを楽しむには、どうすればいいですか」と尋ねてくる人もいるかもしれませんが。そのためには取りも直さず、みなさんが担当している仕事に、まずは「熱中する」というこ

とではないでしょうか。

「時が経つのも忘れて」などと、よく言いますね。まさに時の経つのも忘れて仕事に熱中することで、働くことの「楽しみ」は生まれるのではないのでしょうか。「早く終業時間がこないかな」と時計ばかりを気にしながら、イヤイヤながら働いている人が仕事に熱中できるわけもありません。そして仕事に熱中できないから、働くことの「楽しみ」も見つけられないのです。

仕事に身が入りませんから、「いい仕事」などできるはずもありません。失敗ばかりしてきますから、誰からも評価されません。出世も、お金儲けもできません。「幸運」が向いてくることなどないでしょう。

幕末に佐久間象山しゅうまげんという人がいました。今の長野県に生まれた人です。

たいへんな秀才で、科学、医学、軍事学、漢文とさまざまな学問を修めました。技術者としても優秀で、大砲を鑄造ちゆうぞうしたり、ガラスを作ったりもしました。日本ではまだ珍しかった葡萄酒の製造にもチャレンジした人であったようです。教育者という一面もありました。明治維新で活躍した、勝海舟かつかいしゅう、吉田松陰よしだしょういん、橋本左内さなひ、坂本竜馬りょうまなどはみな、この象山の門下生です。

さて、象山が、こんな言葉を残しているのです。

「たけなわに真の楽しみあり」というものです。

「たけなわ」とは、「熱中する」ということ。「真の楽しみは熱中することにある」という意味ですね。

象山という人は、勉強することにしても、何かを製造することにしても、人を教育することにしても、熱中しながら楽しみ、また楽しみながら熱中できた人であつたと思うのです。そういう意味からいえば、象山も「運のいい人」の一人であつたのでしよう。

歴史に名を残すというのは、「運のいい人」でなければ、できるはずありません。だからこそ、あれだけの偉業を成し遂げることができたのではないかと思うのです。

私たちが「働く」ということに関しても、同じではないかと思うのです。

いかにして仕事に熱中し、いかにして仕事を楽しむか。熱中し楽しむことができれば、「いい仕事」を成し遂げられるのです。

高い評価を受け、出世し、お金持ちになれる。つまり「幸運」が自分のものになるのです。